



1993 年 (平成 5 年)
3 月号 (No. 574)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 赤シャツ由来記……山本朋三郎…(1)
マッキンリー登山登録の件……(2)
海外の山……(2)
「まさかの「登頂五百人」」
韓国山岳会との会談に関する報告(上)
……大森弘一郎…(3)
森林インストラクター資格取得のす
め……小倉董子…(4)
東西南北……(5)
臨時総務委員体験記「安達太良・
鬼面山(下)」ほか
上高地山岳研究所の利用について
……(6)
図書紹介……(10)
「至高」「カラヒ・ヌナ合宿報告書
'92」「八方破れひとり旅」
自然保護随想……(12)
報 告……(12)
「第 30 回木暮理太郎翁碑前懇親会報
告」「山里寿男山のデッサン館をた
ずねて」ほか
会務報告……(15)
1 月定例理事会、ルーム日誌、会員
異動、山研・ナムチャ合同募金応募
状況、新入会員(復活)、住所・住居
表示変更
お知らせ……(18)

赤シャツ由来記

山本朋三郎

私の赤シャツの胸には一九八〇の年
号数字が濃い小豆色の毛糸で編み込ま
れている。この赤シャツは私の六十歳
の還暦を祝って、日本山岳会静岡支部
の皆さんから、昭和五十五年西暦一九
八〇年に贈って頂いた物である。数字
は私の還暦した西暦である。

日本山岳会会員の六十歳以上の方々
で赤シャツを着用される人が最近増え
てきている。こんな時、日本山岳会の
集係から、第一回赤シャツの集いの
案内を受け参加するようにとのお誘い
を受けた。平成四年十一月七日、山梨
県西八代郡市川大門にある四尾連湖畔
の水明荘に、河野幾雄、入澤郁夫、坂

倉登喜子さん達や未知の多くの六十歳
以上の会員が多数集って来られた。

尾根歩き・バス利用・自家用車の三
班に分かれての集合。集合時間にばら
つきがあり、車で一番乗りした私は持
参のウイスキーでチビリチビリ。その
中、顔見知りの皆さんが続々と集まっ
てきて、六時からの会食前に、各自持
参のウイスキー・日本酒で早くも懇親
会の前の前座的な賑わいになる。

部屋割りも終わり定刻の懇親会に
は、全員が赤シャツ着用で集合。集まっ
た会員の胸のポケットの年号と JAC
の文字は薄い水色系統の毛糸で編み込
みである。私のだけ年号は濃い小豆色

の毛糸で編み込んであり、さらに左上
腕部に JAC 静岡と白い毛糸で縫い
込んでいる。

懇親会の席上で、今着用している赤
シャツは早い人で一万円、最近では二
万円位の自腹で作って貰っているとの
こと。私が還暦のとき祝って贈られた
ので値段は知らない、と話したら多く
の会員はケゲンな顔をされていた。河
野幾雄さんから赤シャツの由来を話し
て欲しいとのことなので、一応の説明
をしたところ、後日、赤シャツの由来
を知っている会員が少なくと思うの
で、文字にして欲しいとのことお手紙を頂
いた。

文字にすると誤りや訂正することが
なかなか難しいので、より正確な由来
をと考え、年次晩餐会で昔の赤シャツ
を持っておられる五、六名の諸先輩に
お尋ねして正確を期した。お話を総合

の会員で JAC の何らかの役員をされ
た会員番号三〇〇〇番台の会員で、②
赤シャツの話の出たとき還暦を既に過
ぎた諸先輩を主体として、これに還暦
前の限定された若い中堅クラスの特定
の会員が人選され、この特定グループ
にのみ着用を許されていた。③赤シャ
ツの製作費はグループ全員の均等割り
負担で作り、グループのメンバーが還
暦を迎えた月に、贈呈式を兼ねた会食
をして山の友情を温めておられた。こ
れは日本山岳会の個人的な小さな小
なグループのことで、この小さな個人
的な私的なグループの呼び掛け、また
は推薦がなければグループメンバーと
なって赤シャツを着ることはできな
かった。④昭和五十五年私の還暦を静
岡支部の皆さんが祝ってくれ、赤シャ
ツを作ってくれたが、昔の赤シャツグ
ループよりクレームがつき、牧野衛さ

お知らせテラップ電話
3234 六六五九

すると次のような
由来である。
何時頃始まった
かは定かではない
が、世話人は佐藤
久一朗氏と折井健
一さんで、昔の赤
シャツを着られる
人は、①東京在住

んが上京、折井健一さんとの話し合いで、胸ポケットのJACの文字位置は左上腕部に移し上に静岡と支部名をいれることで、赤シャツ製作を許され、一度編み込んだ胸のJACの文字をほどこき編み直した。これほど昔の赤シャツは権威があったものである。

その後、この赤シャツグループを世話する佐藤久一朗、折井健一さんの両氏の死去でグループの世話人も沙汰止みとなって、昔の赤シャツグループ活動も沙汰止みとなって、いつの間にか昔の赤シャツの存在すら忘れ去られ、十何年振りに見る、東京会員の着ている赤シャツの、数字とJACの文字は水色系統の色なので、何処か違った赤シャツグループの様に感じた。

風聞するに、製作費が高いので、百人集まらないと作らないとのこと。人数が集まったら七十の還暦になってしまった人も出てくるかもしれない。

(平成四年十二月十六日)

マッキンリー登山

登録の件

この度、外務省領事移住部海外安全相談センターより、次のような情報が届いたのでお知らせします。

海外の山

まさかの「登頂五百人」

今年はエベレストに登られて四十周年になる、ということで、世界最高峰に関わる話題があれこれ聞こえてくる。

「エベレストのてっぺんにととう二百人が立った」という書き出しで、筆者がこのコラムに「延べ二百一人のエベレスト登頂者」を書いたのは、一九八五年十二月号だった。

最初の百人に登るまでは、初登頂以来二十六年かかったのに、次の百人はわずか六年の間に実現してしまった、とこの時は素朴な驚きを書いた。

それから七年が過ぎて、つくづく私たちは、足早な歴史の中に生きている、という思いを禁じえない。

たとえば、昨年九二年一年で、何人の登山家がエベレストのてっぺんにとどり着いたか知っていますか？

春にネパール側から五十五人（この中には五月十二日の『一日に三十二人登頂』の記録も含まれる）、チベット側から三人、秋にネパール側から三十二人、計九十人である。

これで、エベレストに登った人間は、延べ四百八十五人に達した。

シエルバのアン・リタの「七回登頂」スンドレの「五回登頂」故加藤保男の「三回登頂」のように、この最高峰に「通う」人間までいるから、実数で言えば四百二十三人になる。

単独、無酸素、難ルートなどなど登り方もいろいろあるが、頂上まで行かなかった人の中にも、すごい人間がいる。たとえば、フランスのピエール・タルディエールは、九月二十七日、南峰八千七百呎からスキーで下ってみせたが、その滑降が半端でなかった。

サウスコルまで下ったあと、ジュネバスパーから、ウェスタン・クムに向けて落ちる斜面を下った。一九七〇年三浦雄一郎が滑降したと同じ斜面だが、タルディエールは、キックターンを繰り返して下った、という。

ローツェフェースの氷の壁で息を切らしながら、目の前、かつて三浦が滑降した斜面を私は眺めいったことがある。テラテラになった蒼氷に雪のついた急斜面で、そこを直滑降で下った人間がいるとは、信じがたかった。スピードを抑えるために特製のパラシュートを開かせて三浦は滑ったのだが、そうでもしなければ、地獄へまっしぐら、という感じであった。

それを、フランス人はキックターンで下ったというのだ。並みの技術ではないのだろう。

タルディエールは、アイスフォールもスキーをつけたまま下ったらしい。西稜寄りの、クレバスの少ないルートをたどった、というが、脱帽である。

さて、初登頂四十周年の今年は、エドモンド・ヒラリーを名誉隊長とする記念登山隊が「五月二十九日登頂」をめざしてスペインを中心に組織されているほか、十四の隊がエベレストをめざす。許可の問題がどうなったか不明だが、「一人一万八千九百ドル（二百四十五万円）」で登頂を請け負う「四十周年記念エベレスト・バック」も、昨年イギリスで企画された。

どちらにせよ「登頂五百人」は、春のうちに実現しそうである。

(江本嘉伸)

海外の山

(件名) マッキンリー登山の件

(内容) 在アンカレッジ日本国領事館の外務本省に対する報告によれば、昨年(一九九二)のマッキンレー登山者数は、過去五年間の平均を一〇〇名も上回る一〇七〇名を記録し、遭難死亡した登山者数は十一名の過去最高を記録しており、救援活動費も総額五〇万ドルに及んでいるとのことである。そこで管轄の国立公園事務所では、救援活動および死亡者の激増を憂慮し、明年(一九九四)以降に同登山を計画している者に対しては、各々の年の二月十五日までに登録を求める方向で規制を実施すべく検討中であるとのこと。なお、今年の登山者については、従来通りであるが、出来るだけ早く登録をして欲しいとの意向である。

(九三・二・一五)

(問合せ先) 千代田区霞ヶ関二二二一、外務省領事移住部邦人保護課内、海外安全相談センター

☎〇三―三五八一―三七四九(直)

山研募金に協力しましょう!

韓国山岳会との会談に関する報告(上)

大森 弘 一郎

韓国山岳会の孫慶錫副会長が、国際山岳連盟の松本総会のために来日された時、北アルプスの山岳環境保護に関する話をした。このあとこちらから訪問し、韓国山岳会の幹部と会談し、話合いと協力依頼を行った。

当メンバー：藤平正夫(副会長)、崎忠男(海外連絡委員会理事)、大森弘一郎(自然保護委員会委員)、河西瑛一郎(自然保護委員会委員)

日程：一九九二年十一月二十八日、十二月一日

目的：韓国から北アルプスを訪れる登山者が、日本の山のルールを知らないために時に起こす、さまざまなミスを防ぐために、今後どのようなことをしたら良いのかの打ち合わせ。山の自然環境保護に関する打ち合わせ。

全日程を通して、当会の会員でもある孫氏の歓待をうけた。まずソウル郊外の道峰山、北漢山を歩く。みかんの皮の絵の入ったゴミを捨てないように、との注意プレートが要所、要所にあり、山はよく清掃されていた。下山中の夜道では、他のグループの若い登

山者から我々の足元を照らしてもらったなどの親切をうけた。

韓国登山者のモラルの高さを実感し、また孫氏から韓国の山岳愛好者の実態につきいろいろと話を聞くうちに、この問題を考えるには、我々自身の視点をもっと韓国人の立場に近づければならないことに気付いた。

会談のために準備してきた文書を、会談の前夜に徹夜で打ち直した。これを打ちながら、いろいろの疑問をもった。

例えば「日本語を話せず、読めない」日本の山を訪れるお客に対して、登山届をどうやって書いてもらうか。日本人が外国で犯してきたミスと同じようなことを、お客さんに犯さないでほしいと言えるか。高山植物などに対することを読める注意書きで伝えることをしないでいてルールを知らない、といえるか。はたしてどうなっているか知らないで登山者保険に入っているか。知ってよいのか。(後で判ったことだが、韓国にこの種の保険はなく、日本では外国人は入れない)など。

る。

《日本の山を楽しむ外国からのお客様のためにどうするか、の考え方》

過去、日本人も外国に行き、その習慣とルールを知らないために、ずいぶん多くの人達に迷惑をかけて来たし、また今もそれは直っていないかも知れない。しかしそれにより我々の評価は下がったし、その経験を通して自分たちの行動が自分たちに戻ってくる事を理解するようになってきた。

我々が困るからというより、我々と同じことが、少しでも少ないようにと願う姿勢で考える。事情を知らない一般人から、遠来のお客様を守り、不快な思いをされないために考える、以下のような案は、これのたたき台であり、ここから良い方策をかためたい。

《案》パンフレットにするか、地図にのけるか、もっと良い何かがあるか。その中に各国語(日本語、英語、韓国語、中国語)で以下のような案内を入れる。※《美しい日本の山へようこそ》というパンフレットの案をつくったが、その内容は次号。

十一月三十日、ソウル市を見下ろすエンジニアクラブで、韓国山岳会の方々と昼食を共にしながら会談した。メンバーは副会長孫慶錫氏、同金相謙氏、同金大煥氏、監事車載鉉氏、事務局長 JEE BUNG WHAN 氏、朝鮮

日報社 月刊誌「山」編集部長朴光星氏、ほか。会談では、用意した文書はおおむね好評で、皆さん真剣に考えてくれて、我々の思うことも良く理解してもらえた。今後日本山岳会と韓国山岳会の親睦を深め、この問題に對し協力しあう取り組みこととなった。

孫氏の話とこの懇談を通して教えられたことの幾つかを参考にまとめてみる。

1、韓国では良い岩登りのゲレンデがある関係もあり、登山は普及している。しかし二〇〇〇以上の山がなく、次は日本の北アルプスということになる。

2、また、永年の渡航禁止が解かれ、また富山直行便もできれば、多くの登山客が北アルプスを目指すのは当然である。その中にはいろんなレベルの登山者が含まれる。

3、彼らは当然ながら、日本人と習慣が違う、日本の習慣をしらず、食の好みも違う、日本語は判らず、読めない。

4、日本の山の実態やルールを知らない人も来る。まだ「蚤から」スタイルが残っている。

5、習慣の違いを嫌われることがある。例えば食事の食べ方、風呂の入り方。

6、地図の山小屋と登山道のマークをみて、冬も小屋が開いていると考えることもある。

7、韓国では入っていない所には柵がある、柵のないところは入って良いと考えてもおかしくない。

8、韓国の山で、ミカンの皮の標識の意味が我々には解らなかった、これは「ゴミを捨てるな」の意味であることは聞いて解った、同じことが日本を訪れた人にも有り得る、だれにでも解かる標識が必要だ。

9、大切にしてもらえもの、例えば地図に注意書きをセットして作るのが

森林インストラクター資格取得のすすめ

小倉 董子

私たちは、山を通して生涯の友を得、そして、自然の厳しさとやさしさから、生きる喜びと知恵を学んできた。私は山登りをつづけてきて、本当によかった、と思っている。いま若者たちの登山離れが嘆かれている。幼少から、自然に親しむチャンスが、少なかったからだろうか。本来、親から子に伝えるものだと思うが、いまや、親自身、自然とのつき合い方を、知らない世代になってしまったようだ。

幸いというべきか、バブル崩壊を機に、これまで、かえり見られなかった、自然に對する関心も深まり、価値観も変ってきた。余暇時間の増加（平成四

良さそう、しかし同時に、適切な配布法を考える必要がある。

10、解る登山届、外国人の入れる障害保険、事故や困った時の連絡法（言葉）などの完備が必要だ。

11、日本の登山情報を知らせる工夫も必要である。

この会談を通して考えたことを、これから実行しなければならぬ。

—— 続く ——

年九月十二日より月一回土曜休日を、国公立小・中・高校実施）や交通網の発達で、森林を訪れる人も多くなった。一方、過疎化した山村では、積極的に都市の人たちを受け入れ、地域や林業の活性化に役立てたい、と願っている人たちがいる。

林野庁は、一般の人たちに森林に對して理解を深めてもらうために、森林の働きや樹木、野草、野鳥などの名前を教えたり、林業など、森林と人間のかかわりについて話したり、森林内での野外活動や、森林の案内ができる、知識や技能をもった人を養成、全国的に確保するため、森林インストラク

ター資格制度を設けた。平成二年末に官報公示され、その実施団体として、全国森林レクリエーション協会が、認定された。森林インストラクター審査委員を選考する際、当時農水省長官小沢昭氏から、山関係で、指導者として経験ある女性を採用したい、という話を持ちあがり、林野庁OB、当会会員の伊藤敏氏の推せんで、私がお引き受けすることになった。自然と人の橋渡し役ができれば、と願っている。

当会会員には、各分野で活躍する、人間性豊かで、個性的な人たちが多い。この素晴らしい財産を、社会に還元してはどうだろう。ぜひ森林インストラクターの資格取得に、挑戦していただきたい。

平成三年第一回の応募者は、四五三名。北は北海道から南は沖縄県まで、反響の大きさに、驚ろかされた。合格者は四十九名。平成四年の応募者四四一名、合格者六十七名。厳しすぎるという声も聞かれるが、それだけに、価値ある資格といえる。

受験資格は、二十歳以上。試験公募は、六月一日（火）〜七月三十一日（土）。一次試験は、九月十一日（土）。二次試験は、十一月六日（土）〜七日（日）。試験と範囲は、森林、林業、森林内の野外活動、安全と教育。受験料は、一五〇〇〇円。森林インストラクター養成講習（任意

臨時総務委員体験記

中世古隆司



の講習)の公募は、四月十五日(木)～六月十五日(火)。講習期間は、八月十六日(月)～八月二十三(火)。受講料は、三六〇〇〇円。定員一〇〇名(定員を超えた場合は抽選)。

受驗および受講資料の請求は、角3型封筒（資料返信用。郵便番号、住所氏名を明記）に、一七五円の返信用切手を貼り付け、その中に資料代一二〇円相当の切手を入れ、別封筒で「問い合わせ先」へ、お送りください。

問い合わせ先は、〒107 東京都港区赤坂一―九―一三三 三会堂ビル 9F 社団法人全国森林レクリエーション協会 森林インストラクター事務局 ☎〇三―三五八五―四二一七 担当有蘭氏。

た。そんな訳で山岳会のある市ヶ谷には大変便利になり、暇な夜にはちょくちょくルームに顔を出すようになった。その時気がついたことであるが、集会や委員会のある夜以外でも誰かいて山岳会の仕事をしていることであった。私も毎日顔を出しているわけではないので断言できないが、その筆頭がコンピュータに取組んでみえるM氏であり、O氏ひきいる総務委員会の面々であった。ことに年次晩餐会が近づいてくると、忙しさは日を追って増えていった。中でも中心になっているF氏、S氏などは彼ら本来の仕事に相当支障をきたしているのではないかと思われる程であった。これではあまりに申し訳ないと、「私にも何か手伝わせて下さい」と申し出て、総務委員会の臨時メンバーに入れていただいた。と書くと立派な心懸けのようであるが、本音は集会の帰途、近くの居酒屋に皆と立寄るのが楽しみだからである。

さて、昨年の晩餐会行事は例年の如く支部長会議、晩餐会、記念山行のほか、ナムチャバルワその他の報告会が加わり、いかにスムーズに運営していくか、二ヶ月前からスケジュール表を作って準備を進めていった。中でも大変に見えたのは、晩餐会出席者の確実な把握、立食パーティなどと違って六〇〇余人の会員がテーブルにつく会

食がいかにも大変なものかよく分った
申込み〆切後の出席希望者もかなりあ
るし、逆にキャンセルもあり、直前
なるまで確定できない。そして出来る
だけ正確を期するため、最後の数日で
仕上げるのであるからそれは大変で、
晩餐会の葉が出来上ったのは晩餐会前

回はたまたま総務委員会というものに接したわけであるが、他の委員会も大同小異であろう。毎週建設中の上高地山研へチェックに出かけられたO氏夫妻、あるいは毎年、毎月きちんと機関紙を出すのが、いかに大変であるか想像に難くない。

夜の十一時半、それ以外海外登山報告会用の資料作りに徹夜でワープロを打った委員もいた。その葉でさえ、ホチキスで閉じて終りかと思いきや、ホチキスの針の裏を木槌で潰して、一冊一冊丁寧に表紙を糊づけして行く。これも完璧主義のマツダイズムの表われか、それとも本人の性格か、とにかく全国から集まる会員に出席した甲斐があったと思われるようにしなければならぬとの思いが込められていた。それともう一つ大変だと思ったのは、宿泊の斡旋である。東京で多人数の室を確保するのが大変なのは常識であるのに、結構キャンセルがあり、ツテを頼っ

私の所属する東海支部は全国の支部の中でも最も活動的な支部の一つであると自負しているが、私も長年その中にあっていろんな実務にたづさわってきた。そして忙しい時など、本部には事務員がいて良いなあと思ったこともしばしばあった。しかしこうして現実の姿に接し、その仕事量に驚かされた。

所詮、登山や山岳会が好きでやっていると言ってしまうばそれ迄だが、五千余人の会員を有する一大山岳会に発展した今、こうした人々の縁の下で支えがあって初めてスムーズに運営されて行くことが、あらためて認識された次第である。

安達太良・鬼面山下

大橋克也

以前から一人歩きの山は苦にしないのだが、最近是中高年齢者の登山に対し、風当りの強い意見も多い。まして六十歳を過ぎると、家族や身近な人の心

配してくれる気持も背負って登らなければならぬ。これが意外にリュックの中味より重いのだ。

高みに登るにつれ、風も一層強くなり、斜めになった倭性灌木の梢を削るように唸ってゆく。勾配もきつくなり、息をはずませて休む間隔が短くなってきた。こうなると、先程脳裏をかすめたマロリー談義もどこかへ去り、ひた

上高地山岳研究所の

利用について

山研運営委員会

会員名簿には「山研利用の手引」が載っておりますが、念のため、利用の方法について概略お知らせ致します。

- 一、利用期間は概ね上高地バス運行期間となりますが、前もって会報でお知らせします。本年は四月二十九日からとなります。
 - 二、利用できる方は本会々員および会員からの紹介のあった方に限ります。
 - 三、利用希望者は、本会事務局または直接山研へ申込んで下さい。非会員だけで利用する場合は紹介者を通じて申込んで下さい。
- 現地〇二六三—九五—二五三三

すら足を前に出すのみだ。

二番目の瓦礫の斜面を登りつめると鬼面山の頂上だった。鬼面山の呼び名は、斧で断ち割ったような北面が荒々しくそり立っている、特異な風貌からいわれたのであろうか。茶褐色の岩と土、枯れ草、灰色の雲—積雪こそ無かったが、冬の序奏がひしひしと迫る風の吹き荒ぶ頂では、周囲をゆっくり

四、申込内容は、氏名、宿泊日、人数、到着時間等で、申込後の変更等は早目にご連絡下さい。

五、食事は自炊でお願いします。ただし、ご飯、味噌汁、漬物程度は事前に管理人に頼めば実費で賄ってくれます。

六、便所、浴室等の共同施設を除いて掃除は各自で行なって下さい。寝具は管理人の指示に従って整えて下さい。

七、消灯は午後十時、一階集会室(食堂)以外は禁煙となっておりますので、他の利用者の迷惑にならないようにして下さい。

八、宿泊料は現地で管理人に支払って下さい。

会員 二五〇〇円、非会員 四〇〇〇円、小学生 一四〇〇円
団体会員は一名のみ会員料金。

見渡すゆとりさえ持てなかった。

もし行けたら箕輪山まで、と考えていた。今日の足の調子は良好だったが、やはり己の体力と下り坂の天候を見定めて、この先の登高は中止した。箕輪山は半ば雲に隠れ、尾根伝いの鉄山、安達太良の姿も見えない。

ウインドヤッケを着て、さて、下山だ。風がともに吹きつけて痛烈に寒い。しかも下から吹き上げてくるので、流れる鼻水まで逆流する。瓦礫地帯を過ぎるまではこの状態だった。下界は視野が開けて、野地温泉は眼下に青い屋根を見せているのだが……

ガスの動きの切れ目に、チラと鉄山が見えた。四十年以上も前のことだ。私の青年時代の曙の頃、この安達太良連峰の冬の尾根伝いをスキーで縦走しようとし、あそこまで行ったのだった。それこそ何も見えない風雪混りの日だった。甘酸っぱく、しかもちょっぴり苦い思い出だ。その頃の、まるで無鉄砲な行動と、全く貧しい装備—単板の今にも壊れそうなスキーと、継ぎはぎだらけのスボン—戦争が終って間もなく、それしかない時代だったのだ。やる瀬ない昔を胸に蔵いこみながら下りた。帰り道は早い。枯れ切った白茶とモスグリーンが半々の笹原がひろがっている平まで下った。一見、荒涼とした景色だが、野地、鷲倉、横向の

温泉群を取り巻く周囲の山々は、どこか丸味を帯びて、独り下山する私をやりわらかく包んでいる。今日は確かに静かだが、この磐梯、吾妻の自然にも、開発というモンスターの爪がひたひたと押し寄せているのだ。

十文字から新野地スキーコースの分岐点にきた。風の当たらない笹藪の蔭で、パンと牛乳の食事をとった。十一月のうす陽を浴びて、裸のブナ林をわたる初冬の歌を聞きながら食べた。

—終り—

年次晩餐会に

谷口現吉君と

金山淳二

追記 それから二週間後、その夜の写真が出来て驚いた。いつも私はロクな写真しか撮れないのに一枚だけ素晴らしいのがあった。それは空椅子の先きで出席者名簿をチェックしておられる佐々保雄さんのポートレートだった。髪の毛一本、ヒゲ一本までも私には思えも及ばぬ出来映えで、どう考えてもカメラの前の空椅子に超スーパーフィリターがはまっていたとしか思われず、谷口君との同席の感をさらに深くした次第です。

谷口君との山のつき合いは六十年以上だが、まだまだ続くだろう。

ウエストンに逢った

田畑真一

それは伴野清氏が昭和十二年、ロンドンでウエストンと対談されたときの思い出話である。今を去る半世紀以上も昔の話であるが、今まで世に紹介されたことがないとのことである。それで伴野氏にはご記憶をたどっていただき、とくに本紙『山』に発表の機会を得た。なお、伴野氏は大正五年、槍ヶ岳・穂高岳の逆縦走に成功、山崎安治氏が紹介(『新稿日本登山史』)した通りである。伴野氏からは私のかねてからの聞き取り依頼に対し、平成元年十二月二十五日付「今月十七日付の御手紙有難く拝誦いたしました。小生ウエストン氏に拝眉したのは昭和十二年だったと存じます。当時、勤務地がロンドンでしたから、御訪ねしたのですが、今となっては会話の記憶はうすら

ぎ、従って御目にかかっても御役に立つ御報告は出来ないと思います。然し御来駕の趣は拝承しました。明年一月九日(火)午後三時頃は好都合ですから拙宅にて御待ちします。新宿より飯田橋又は秋葉原駅行のバスに乗り、山伏町バス停に下車すれば、五分位のところに拙宅あります。先は右御返事まで、草々(田畑注、原文のまま)とのことの手紙をいただいた。

それで平成二年一月九日、松本市の三井嘉雄氏(本会会員)にもご同行をいただき、東京・市ヶ谷加賀町の伴野氏宅へ参上した。ときに伴野氏、九十四歳。ご壮健そのもの。お声にも張りがあり、私どもはすっかり圧倒されてしまった。以下、その際の要旨をあげる。

私は大学卒業後、大蔵省に入り、アメリカ経由でイギリスに向かい、ロンドンの財務官事務所に赴任した。それで良い機会だから、一度ウエストン先生に逢いたいと思っていた。半年くらいしてから手紙を差し上げ、お逢いする日取りを決めてもらった。お宅は住宅街で、東京でいえば、まあ、文京区か山の手、ハムステッドだったと思う。同じようなつくりの家が並ぶ一角で、一軒家だった。なお、アパートではなく一軒家だった点について、後日、さらに三井氏が伴野氏に対して確認され

たところ、ハムステッドのデタッチドハウスであり、つまり、二戸一棟の二階建て独立家屋だったとのこと。これは中流家庭の典型的住居だった。三井氏は日本人船員伝道会が借りていた住居とも考えられたが、確証はない。以上、三井氏の確認については島田巽氏をはじめ、川村宏・三井嘉雄・安江宣の諸氏の「W・ウエストン年譜その4」(『山岳』第八十五年)を参照されたい。

さて、話をもどそう。引き続き、伴野氏のご記憶によるお話である。

お宅は小じんまりとしたつくりで、通されたのが、せまい部屋で、日本間というところ八畳くらい。先生の居間か、書斎だったと思う。事務机があり、その向こうに窓があった。先生は事務机のいすにすわっていた。それで先生の顔は逆光の感じだった。話といえは「この頃、山にお登りですか」とか、「あまりお出かけにならないのですか」などと尋ねた。向こうからは、日本の山登りの状況を聞かれたりした。すべて英語での対談だった。しかし、初対面だったし、表敬訪問みたいな感じがなかった。それで、打ちとけた話ではなかった。それに今から考えると、先生はご機嫌がよくなかった。日独防共協定が成立したり、その四年前には満洲国ができた、日本がイギリスに反対

し、ドイツと手をにぎったりの時勢だったし、そういう背景で会見たからだったと思う。

思えば、伴野氏が逢われた数か月前、つまり、五月十七日にはウエストン夫人が死去している。ウエストンにしてみると傷心の思いの深い時期だったわけで、こんな点も対談時に影響していたのでは、と私は考える。

ちなみに平成四年五月五日、三井氏と私はロンドンを尋ね、ハムステッドの旧宅への巡検を行った。

〈別記〉

中村純二先生(資料委員長)のご紹介により、伴野氏に拝眉の好機を得た。なお、伴野氏には平成二年十二月一日、急逝。本稿が生き証人による最後のお話であるやの思いを持つ。合掌。

昔の山小屋点描

中井修二

表題は私が昭和五年七月二十日から三泊四日を費やし、鳥帽子岳から三俣蓮華岳、槍ヶ岳、徳本峠への道程で宿とした山小屋に就いて、私が現在持っている記録から当時の有りの儘の回想を点描した。

鳥帽子小屋(第一日)

山小屋の主は上條文市翁で愛想が良

資料寄付のお願い

登山の用具、記録等、整理する時考えて見て下さい。他に寄付する前に山岳会へ。捨てる前にも再考を。

資料委員会

「さあ、火に当りなせえ」
 と言って羚羊の毛皮を炉端に敷いてく
 れた。

「今夜のお客さんは二人だけで俸
 でえ」

「爺さん、うんとご馳走頼むぜ」

「はあ何よりゆっくり休めませう」

「囲炉裏の周りでいろいろと話し合
 い、昔の佐々成政が軍用金を隠した山
 のことや有峰の平家の落人のことにも
 触れる。」

「山の景気はどうですかね」

「雪も少いが…今年位お客さんの少
 いことはねえ」

「雪がそんなに少いかね」

「大正十三年から七年振りです…」

「雪まで不景気か、は…」

この登山季に僅か二人の客では幾ら
 天気が悪くても爺さんのこぼすのも無
 理はない。夕飯は好物の岩魚で舌鼓を
 打ち山小屋の第一夜を結んだ。

三俣蓮華小屋（第二日）

この小屋では近くの沢で岩魚がよく
 釣れるので毎食事に添えてくれると聞
 いていたので、今日は如何と尋ねた。

「今日は生憎無い、小屋の屋根修理
 に忙しくて釣に出られなかった」
 と言う、少し失望したが了承した。

当日ここに泊まったのは慶応の学生
 四名、千葉県成田町の歌人、画家、園
 芸家のグループと彼等の案内人一名、

横浜居住の公務員の私と東京の商人で
 計十名であった。

夜は時折雨、夜中三時頃から恐い様
 な強い風雨になり物凄いい音を立てて屋
 根や壁を打った。

雨は止んだが天候は不安定、朝食を
 済ませ私達が出発準備にかかると、小
 屋の主は、

「今日は駄目だ、お客さん方滞在し
 たほうが安全だ」

と盛んに勧める。しかし宿泊者は誰も
 滞在することを望まず、慶応の学生四
 名は槍ヶ岳か穂高方面へと六時十分出
 発、次いで成田町のグループは烏帽子
 岳方面へ出発するという。私は出発準
 備が完了しているので六時二十分に発
 つ。外は濃霧で目標とする峰は姿を見
 せない、地図を唯一の頼りとして独り
 槍ヶ岳を目指した。

徳本峠小屋（第三日）

降雨と汗で可成り濡れた。徳本峠路
 は時間が遅いから上下する登山者はな
 い。小屋には今までに何回も世話にな
 って居り気安く爺さんと話せるのが
 嬉しい。

「大部濡れちゃったよ」

「ストーブを焚きまきま—直ぐ乾く」

「有り難う、頼むよ」

小屋のストーブは囲炉裏に火を焚く
 ことで、一抱えもある丸太を両方から
 燃やしその間に小さな燃木を入れ、そ

の上に濡れたシャツ類を吊して乾して
 くれた。夕食は温かいライスカレーに
 トマトであり、一日の疲労を補うに充
 分であった。明日は鳥太宿へ下るのだ、
 最後の山小屋の夢は安らかであった。

すべての会員に

考えてもらいたいこと(1)

羽賀克巳

国立公園管理員として約三十年間、
 全国の山や海を転々し、高度成長期の
 レジャーブーム、列島改造ブームの二
 つの大波が山奥まで押し入って来た時
 は、無力感と絶望感を嫌というほど味
 わった。

それがやや落ち着いたと思ったらリ
 ゴトブームである。過疎地の振興な
 どと言ってるが、利益は都市に本拠を
 置く企業に吸いあげられ、昔から住ん
 できた人々には、一部の者を除いて
 何のメリットもない。しかもある場合
 には、彼等の生活の基盤であった共有
 地の土地から締め出されてしまう。そ
 んな現実を至る所で見えてきた。ここ
 きてバブル経済の崩壊とともに、人心
 の荒廃だけを残して計画の凍結や企業
 の撤退である。そのかげで、買い占め
 られた農地や山林原野は、元の所有者
 の知らないまま転売され荒れ果ててい
 る。

一方で日本の山はどんどん便利にな
 り、登山者の数も増えた。便利になる
 ことは良いことだが、それだけ自然破
 壊が進み人と自然との交流が稀薄にな
 る。それに対して登山者はどうな反応
 を見せているか？ 経済成長とともに
 個人所得も増え、今では誰でも気楽に
 海外登山に出かけられるようになった。
 それ自体は喜ばしいと思うが、反
 面私には、手前勝手な無責任な行動に
 思えてならない。自分らの拠って立つ
 基盤である日本の山が蹂躪され破壊さ
 れているのに知らん顔している。ある
 いは海外へ逃げて行く。

かつて我々登山者を温かく迎えてく
 れ、ガイドやボッカとして手助けをし
 てくれた山村の人たちが過疎現象で困
 り果てているというのに、現代の登山
 者は遭難事故やゴミの始末を押し付け
 るなど、迷惑をかけているばかりでは
 ないか。昔は登山者と地元の人たちと
 の間に、単なる経済上の付き合いを超
 えた血の通う温かい交流があり、文化
 の交流があった。それが、高度成長政
 策によって引きおこされた経済至上主
 義の中で失なわれてしまった。

これは、登山者個々の資質云々の問
 題ではなく、個々の登山者にそのこと
 を問いかけるシステムの問題であり、
 わが国の山岳界で最も古い伝統と実績
 を誇る日本山岳会こそ、山の自然保護

についての発信源になるべきだと考える。実際の体験として、自然保護行政にとって日本山岳会の動向は非常に気になる存在である。それだけに社会的影響力は大きいのだ。そして、日本山岳会が自然保護の発信源となるためには、何よりもまず、すべての会員が認識すべき共通の価値観としての基本理念を確認しておく必要があると思う。

『山』第五六九号で「自然保護委員会の行動指針について」の経過が詳しく報告された。この作業に携わった者の一人として、当初企画した「日本山岳会の基本理念」が「委員会の行動指針」に格下げされた形で落着いたことはなほだ残念である。

環境問題が世界的な課題として捉えられている一方で、山河の破壊がますます拡大してゆくわが国の現実を見ると、日本山岳会を設立された発起人諸賢や諸先輩の先見性と社会的責任感について、すべての会員に改めて考えてもらいたいと思う。以下は、九一年度自然保護集会で配布された討議資料要録の、起草者として個人的責任による投稿である。

『いまなぜ日本山岳会における自然保護の基本理念か』

先達たちが営々と護り伝えてくれた日本列島の山河や海辺の自然が、いま壊滅の危機に瀕している。元凶は、国

民多数の実生活上の要請などは完全に無視し、過去に執られた政策の破綻を糊塗するためと、大企業に集中してやり場を失ったバブル資金のはけぐちとして考え出された新政策、すなわち、総合保養地域整備法によるリゾートブームである。

法律制定前後の狂乱状態は落ち着いたものの、企業による土地買い占めは農山漁村から離島僻遠の地にまで及んでいる。そして、大規模なゴルフ場やスキー場、マリナなどリゾートホテル等々の画一的な構想ないしは計画が日本列島を覆いつくそうとしている。中には、自然との触れ合いの場というキャッチフレーズを掲げているものもあるが、それとても施設が中心であり、利潤を追及する自然の商品化に他ならない。つまり、自然との触れ合いという当節流行の言葉を巧みに採り入れた商業主義に他ならないのである。

このような現実を前にして、わが国で最も古い歴史と伝統を誇り、その時々々に優れた先見性を世に問うてきた日本山岳会は、いかなる視座からどう対応しようとしているのか。

確かに、長野冬季オリンピック招致運動に伴う「岩菅山スキーコース開設計画」や、「屋久島縄文杉のロープウェイ計画」等については明確な態度を示

し、それなりの成果を収めたことは否定しない。しかしそれとて、日本山岳会が主導的な役割を果たしたとは残念ながらいえない。まして、日本列島の優れた自然を壊滅させようとしている異常なリゾート計画に対する日本山岳会の視座も対応姿勢も、国民にはもろろんのこと、会員に対しても一向に明らかにされていない。――続く――

キルギス登山連盟より

登山家の皆さん
キルギスの山仲間よりご挨拶を申し上げます。

キルギスの登山家達は他の旧ソ連邦構成国の登山家と同じく長い間、世界の岳人達から離れた存在でした。しかし今や時代は変わりました。多くの旧ソ連の国々の登山協会は、我々キルギス登山連盟と同じ様にUIAA（国際山岳連盟）のメンバーになったのです。私たちキルギス山岳連盟はUIAAのメンバーとして、外国の山岳連盟の人達と、より一層の緊密な友好関係をきづいてゆきたいと思っています。

そこで私達は二つの国際的な行事にご招待申し上げます。一九九三年六月にハン・テングリのスピード登山の個人競技と青年集会を開催致します。

若し私達のプログラムにご興味をお持ちならば、ヴィザ取得に必要な正式な招待状並びに詳しい内容をお送り申し上げます。

皆様のご参加をお待ちしております。

キルギス共和国オリンピック委員
会々長 クルムリエフ
キルギス共和国体育省スポーツ委員
会々長 ユムナリエフ
キルギス山岳連盟会長 ビルコフ
天山国際センター副会長
コミサロフ

五月アルピニスト集會

一九四八年以来、キルギス山岳連盟はビシュケックより四十キロにあるアラ・アルチャ峡谷で伝統的にアルピニスト集会を行っています。今回の集会では、未経験のアルピニストにとって、一人であるいはガイド付きでいろいろな峰に登る良い訓練の場を提供されます。すなわち、初心者達は、いろいろなレベルの熟練したアルピニストの登攀を見たり経験したりすることが出来ます。今回の一九九三年は国際アルピニスト集会を考えています。この集会の組織並びにスポンサーは、キルギス共和国オリンピック委員会、キルギス山岳連盟並びに天山国際山岳センターです。

参加者は、ビシュケック（キルギス

共和国の主都、昔のフルンゼより現地までの往復、登攀指導料、登山学校入学(三、四日間)は無料です。また、食糧、ベンジン、ガス等の購入についてお世話致します。登山用具は各自持参のこと。

1 (四月二十九、三十日) ビシケツク到着、アラ・アルチャ峡谷各キャンプ

2 (五月一日) 指導、登攀準備、集会

3 (五月二、七日) 登攀、登山学校

4 (五月八日) アラ・アルチャ峡谷へ下山

5 (五月九日) ビシケツク発

有料によるその他のプログラム

1、天山地区(ハン・テングリ、ポベイタまで飛行) 2、ヘリスキー

一九九四年並びにそれ以後のパキスタン領内における登山料

パキスタン政府は、一九九四年度登山シーズン並びにそれ以後に有効とする登山料の改定を行った。この決定により、一九九四年の登山許可のため、一九九三年一月一日より大使館にて受けつける申請に対し、次のような新しい登山料が適用される。

山の高さ 登山料

1、K2(八六一一呎) 九〇〇〇米

各チーム五人を越える場合一人につき加算される額は一〇〇〇米ドル

2、八〇〇一〜八五〇〇呎 \$ 七五〇

3、七五〇一〜八〇〇〇呎 \$ 三〇〇

4、七〇〇一〜七五〇〇呎 \$ 二〇〇

5、六〇〇一〜七〇〇〇呎 \$ 一五〇

〇 \$ 一五〇

〇 \$ 一五〇

〇 \$ 一五〇



図書

紹介

至高

谷口現吉遺稿集

谷口名誉会員が、登高行などに数多くの名文を遺されていることについては、夙に知られているが、この度一周忌を前に、慶応山岳部登高会有志による編集委員の方々のご尽力によって、標題の遺稿集が上梓された。

谷口さんの「高所雪中露営」や、「安全限界に対する論説」等は、戦前、戦後を通じて、多くの若い学生登山者を魅了し、バイブルのように読まれていた。

かく云う私もその一人であり、現役の山岳部員であった当時、本書に収録されている「日本の冬山―若い仲間の為」の文章は、何度読み直したかわからない。今回も何年ぶりかで改めて読み返してみたが、新鮮な共感が蘇ってくるから不思議である。

私自身も、ずっと以前から谷口さんの文章を一冊にまとめて欲しいと強く念願していた者の一人である。

厳しい冬山を目指す多くの若い登山者に少しでも谷口さんの登山感とでもいったものにふれて欲しかったからである。

本書は、このように谷口さんが生前、登高行、登高会会報、日本山岳会の『山岳』『山』『登山技術』等に遺された遺稿七十余点の中から厳選した二十一点を収録している。即ち

論説・紀行・随想……十四点

著者による追悼文……三点

に加え、谷口家ゆかりの日本弘道会に会報からも私的な想い出等四点が転載されている。

巻末には、略歴、山行歴、執筆歴が手際よくまとめられている。本書の末尾に掲載されている義子夫人の挨拶文も、多くを語らなかつた谷口さんの家族に対する思いやり、愛情が想起される素晴らしい文章で印象にのこる。

なお題字の「至高」は、谷口さんの

筆蹟によるもので、谷口さんが、日頃「信條」とされていた言葉であるとのこと。

本書の紹介は以上の通りであるが、旧知の方はもちろんのこと、とくにこれから厳しい冬山を目指すという若い登山者の方々に、敢えて一読をお薦めする次第である。

平成五年一月二十一日発行 A5版 二一〇頁 写真十四葉 発行者谷口義子。非売品であるが、希望者は、本会事務所または茗溪堂書店にて頒価三〇〇〇円で入手できる。

(松田雄一)

カラヒ・ヌナ

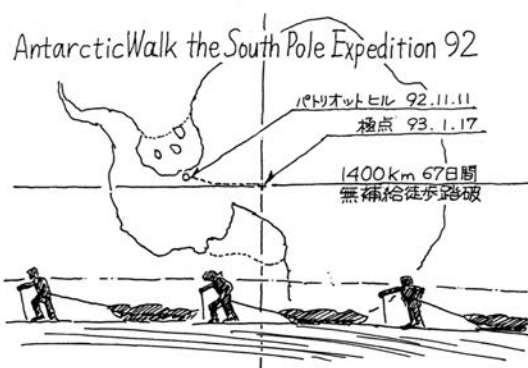
合宿報告書⁹²

アンタークティック

ウォーク南極点探検隊著

本書は人曳きソリによる南極点探検隊のトレーニング合宿報告である。カラヒ・ヌナはグリーンランドを指す現地語で「人間の土地」を意味する。地名や道具は現地語を優先した、と吉川隊長の巻頭のことばにある。

アンタークティックウォーク南極点探検隊は、一九八九年、地球環境の保全を訴えてロバート・スワンを隊長に七ヶ国八人によるアイヌウォーク隊の一員として参加した大西宏氏が北極点



カット 宇都木慎一氏

に立った処からスタートしている。具体的には九〇年より計画が進められ、その間に大西氏はエベレストに登頂し、南極点に立てば三つの極を自らの足で到達する世界ではじめての人間になるはずであった。ところが、九一年十月、ナムチャバルワ峰で大西氏が雪崩で遭難という思いもかけぬ事態となった。

計画遂行こそ故人の遺志ととらえ、隊は再建された。新たに吉川氏が隊長となり、北海道で二回目の合宿、南極視察を経てこの合宿が組まれた。スポンサー探しに手間どり、予定より二ヶ月遅れたが、五月十八日、グリーンランド東海岸のアンマサリックから

五〇キロの氷床をスタートし、内陸部の観測基地(無人) Dye 2 に六月二十九日到達、三四〇キロを三十一日間、徒歩で踏破した。南極を想定し本番さながらに食糧、装備、通信等が試され一定の成果を得た。学術調査も同時に行なわれた。この隊の主な特徴は、(1)人曳きソリの自作、(2)クッカーの改良、(3)独自の食糧の開発、の三点である。ソリは輸送手段のポイントで計画を左右する。納得できるものを自作するには時間と費用がかかる。が、あえてそれを実行したこの隊の探検に対する基本姿勢がうかがわれる。このことは、製作に関わった大西保氏と大西宏氏の名前からつけられた「大西クッカー」や「吉川ビスケット」にもあらわれている。

行動記録、各係報告、調査研究の他、資料として最近のグリーンランド事情をはじめ、自然環境、過去百年の探検史が収められていて、吉川隊長が「今後の極地行に役立つように作成した」ことを裏付けている。合宿後の短い時間でこれだけのものをまとめる力は、各隊員と支援スタッフの実力といえるだろう。南極での成果報告が待たれる。

一九九二年八月二十日 探検隊事務局発行 七八頁 (宇都木慎一)

八方破れひとり旅

天城万三著

筆者の天城万三は筆名。長年「新ハイクング」の編集長としての氏の名前は、この方が有名でむしろ本名を知っている人は少ないが、実は本名は足沢繁幸、八六三番の本会会員でもある。

本書は筆者の長い文筆活動を通じて書き綴ってきたものを一冊にまとめたもので、その構成は四章。第一章はこの本の題名となったネパール、タイ、台湾などの東南アジアの文字通り「八方破れひとり旅」と「添乗記」「新・添乗記」「駅前旅館」の三編。第二章は昭和十六年十一月に書かれた「尾瀬紀行」をトップに十三編の紀行とガイド。第三章はエッセイ十六編、「ア、秋。鉾泉ヨロシ」「真空地帯」「新しいろはがるた」……といったもの。そして最後の第四章も十一編のエッセイと「あとがき」となっている。

第二章以降はもはや一人旅ではなく、いたるところに側近の女連れの女(実は奥さん)、そして影法師との同行二人、三人、多勢なのであり、時には「ヒナニハマレナ」美人が登場し、山、酒、女をとりまき、落語と同じく必ずオチがあって面白い。

例えば第四章の題名を少し拾ってみよう。「宿の客」「星の神話」「大山まいる」「雷鳥に気をつけろ」「新作らくだ」「女ごころ」……とタイトルもユニークであり読者を思わず引き込ませる。

神田生れの筆者独特の酒脱な語り口と軽妙で爽快、ユーモアに富み思わずニヤリとさせられる。こういうのをエスプリのきいた文章というのだろう。読み進むうちに気がつくのだが、前述のタイトル「駅前旅館」があるが、この小説の筆者は例の井伏鱒二。本書の筆者はこの井伏鱒二に私淑していたとのこと、その文体が似るのもムベなかなと思う。

一九九二年十月三十日 (株)近代文藝社 A5版 三〇〇頁 定価一七〇〇円 (小倉 厚)

第30回木暮理太郎翁

碑前懇親会報告

一九九二年五月十六日、新緑の金山平に、大阪、名古屋、長岡、山形からの仲間も迎え、夕方から碑前祭を行った。今や、木暮先生をご存知の方々も少なくなりました。

30回という節目の年なので、ゆかりの方々に小感話をいただいた。今井喜

美子さんは、明治三十八年、JAC創立の年に生れた。五月になると『山の憶ひ出』が思い出されて、年甲斐もなく金山にやって来てしまう。

静岡の牧野衛さんは、霧の旅会は今在会員六名、平均年齢八十六歳で風前の灯である。神谷恭さんの所で、今日はお孫さんまで動員しておいで下さってありがたい。

その、神谷恭さんの次男でおいでの恭平さんは、姉君の木村富久子さんや神谷澄子さん、お孫さんの後藤典重さんを紹介。亡父に連れられて、牛込の先生のお宅へ伺ったとき、「いい息子だ」といってほめられたことがある。日本山岳会へは、父の古い友人に会えるのが楽しみで入会した。父は名誉会員だったが、私は不良会員で、たまに土曜会に出るだけだ、といって皆を笑わせた。

川崎精雄さんは、木暮先生と始めてお会いした時のことを昨日のように話された。昭和十二年、尾崎喜八さん、高畑棟材さん、荒井道太郎さんなどが静かな山の会をつくり、この仲間に入れたもらった。ある山行で集ったが、今日は尾崎さんの所に木暮先生がお見えになるといので山行が中止になった。一日ゆっくりお話をきいたが、甲虫を競争させる話を覚えている。確か、昭和十三年に『山の憶ひ出』が上梓さ

〔自然保護随想〕

保全と管理の必要性

おびただしい数の登山者の訪れる尾瀬は、彼等によって知らず知らずのうちに運びこまれているいろいろの種子の芽生えが方々に姿を見せてきている。そのままにしておくと、やがて激しく茂ってきて原っぱをばうさせるようなことになるかも知れない。もちろん湿原であるから木は育つまいし、森にまでなることはないとしても、尾瀬にあるはずのない外来種などといった草が我が物顔に原を埋めるともなると、そこそ残さなくてはならない尾瀬とは全く違ったものになってしまうだろう。

今の尾瀬の自然そのものが貴重なものだからこそ、それを大切に護っていかうということ、入山者にまで厳しい規制を課すなどといった管理が行われてはいるわけだが、こういったところにまで手は加えられなくてはならないのではあるまいか。

たまたま例を尾瀬にとったが、事柄こそ違え同じような性格のものがいろいろの形で方々で起こってきているに違いない。

そのままの姿で残していかなくてはならない、今のままの姿を保っていかなくてはならないなどということになると、これが時と共に変ぼうしていく自然のことであるだけに大変なことになってくる。そのためにはやはり保全ということになり、管理をしていかなくてはならなくなってくる。

あるがままで手をつけずにただ保護されているだけで、自然の遷移にまかせ、どう変ぼうしようとするは全く自然の成り行きなのだからそれでいい、ということだってもちろんあるだろう。だがこれはこれで少々次元が違う。

(片岡 博)

れ、その特装版を買いそびれた。所が、番号の入っていないのを手に入れ、早速、牛込のお宅へ持参し、サインをお願いした。

しばらくして、絵ハガキ付きで返送されてきた。この絵ハガキは、ロシア人がかいた絵で『兵士』と題し、品の悪そうな下士官が娘さんとあいびきをしてるものであった。

謹厳な先生が、どうして私のような若い者に、こんな絵ハガキを下さった

のか。若しいたずらなら、何かご返事をと考へ、俳優の池部良のお父さん、池部均さんがかいた、横すわりの「半玉」のコケティッシュな絵ハガキにお礼状をかいた。これをご覧になったら先生はどんなお顔をされるだろう、一本とったつもりになった。

先生は、山へ登るとその向うに山がある。それに登るとまたその向うに山が見える。だから登るといわれ、生涯それを実践なされた方だった。

ついで、金山淳二さんは、今年も金山に来ることができてうれし。この木暮碑の建設には慶応山岳部OBの力に負う所が大きい。レリーフは佐藤久一朗氏の作、台座は渡辺宏之氏の大谷石、これ運んだのは前支部長の三井松男氏と、その名をなつかしむように話され、献花、記念撮影をして、碑前祭を終った。

懇親会は、堀口丈夫君の陣頭指揮で沢山の山菜料理がならべられた。例に

より、沢山の差入れもあった。甲州の煮貝、諏訪湖のワカサギ、千葉の貝のつくだに、静岡のワサビ、カナダのキングサーモン、甘いもの、お酒、ウイスキーなど、名前は記さないが、紙上を借りてお礼申し上げる次第である。

最後は、有井館心づくしの手打ちそば。今年も、イワナの骨酒が大好評でお勝手はてんでこ舞であった。

翌日は、甲府北部の帯那山へ記念山行。新しく舗装された、クリスタルラインなる山岳道路を利用、途中、富士山、金峰山、八ヶ岳、南アルプスなどのパノラマを楽しんだ。

山頂の芝生の平で、また大宴会、来年の再会を約し、太良峠で流れ解散をして、記念行事の全てを終った。

参加者 荒木正弘、荒野康子、飯寄忠邦、池田稔、池田陽子、石垣政雄、石間信夫、乾能尚、今井喜美子、今井洋地、入谷浩石、岩堀瑞子、牛木大雄、内山城、遠藤恵太、大塚玲子、岡部みち子、笠原忠夫、笠原玲子、片岡博、金谷信司、金山淳二、金子弘枝、上北和夫、神谷恭平、神谷澄子、川合愛子、川崎精雄、北村義男、木村富久子、小塩丘平、後藤典重、小林啓助、小林碧、小林基子、小松崎和子、小松崎幸子、斉藤健治、里見清子、杉本賢治、高田真哉、田村英也、遠田栄、内藤勇、中

西豊和、中村久美子、中谷實悦郎、成田三左雄、林善二、平井和雄、平山寛、福島一郎、堀口丈夫、前田清子、牧野衛、松本徳子、松本元、葉袋興児、山村季子、山村正光、山本麻子、山本稔、渡辺千之、以上六十三名

追記 パリスの白ピケ帽、デサントの革手袋、グレイのソックスの忘れ物があった。心あたりの方は山村まで。

山里寿男「山のデッサン館」

をたずねて

「山好きの山の絵」をモットーに山に登りながら絵も楽しもうという、アルパインスケッチクラブの有志一同はレベルアップを夢み、新春の一月十日新装なった「山のデッサン館」をたずねました。

勝沼駅と目と鼻の先、ウィーナスと呼ばれる隆起の一番高い所、ぶどう畑の中に白い美術館が見えます。山里先生の温いお出迎えとは裏腹に「晴れますと南アルプスや奥秩父の白い峰々が大きく広がり、また桃の頃の甲府盆地は譬え様もなく美しいのですよ」とトリードマークの顎ひげを撫でながら、この日の薄曇りの天気を頻りに残念がられました。世界でも有数という現役画家に依る個人美術館は同じ丘の勝沼

ぶどうヶ丘センターと共に名所となっており、北窓のある七千余点からなる厳選の展示の絵はそれは素晴らしく迫って参りました。

先生はその一点一点を紹介され、絵に対する心がまえ、構図や色彩等とても貴重なお話しを頂戴することが出来ました。また魅力あるタッチは、昔ながらのフェルトペンを持って「これ一本で描いています」そして「デッサン力をつけるには、山行中は休憩・食事の時間を惜しまず、良く見て一枚でも多く描くこと、人一倍のパワーが必要です」に感心、そして納得。

地酒(ぶどう酒)をご馳走になりながらの懇親会は画論から内外の写生地などへと広がり、充実感に浸り帰途へ。途中ぶどう畑の中を大善寺(国宝)に立ち寄り早速スケッチ。きのうまでと違う何か、キリッとした変化を生じた感がありました。

参加者 入澤、豊田、白田、岸、鈴木、中沢、佐藤、高橋、福島、中川、斉藤(リーダー) (高橋てる子)

アルパイン・スケッチ・クラブ展

登山が好きで、その上絵を描く趣味まで同じくしている羨ましいような人達のグループ展が、一月二十二日から

ら渋谷道玄坂の東電ギャラリーで開かれた。もらった案内状には黒石恒、佐藤知恵子、鈴木正俊、本多勝一、松丸秀夫ら小生熟知の諸氏が名をつらね、また腕前も先刻承知であったので、敬意を表しがてら出かけてみた。

出品数五十三点(油絵十六点、水彩二十九点その他)、出品者四十八人はみな本会の会員だそうである。私は前に、日本山岳会にはコロニーのように同好の群落が自然発生し、それがクラブライフを楽しむ所となっているということを書いたことがあるけれども、このクラブ展が正にその典型的なものだと言えると思う。

出品作には、既に何回も個展を重ねている会員の力作もあれば、また気軽に山旅でスケッチしたと思われる小品も並んでおり、そうかと思えばヴァリスの高い山々やチベットの旅の思い出など、写真とはひと味もふた味も違う山との対話が画面に躍動しているものもみられた。

この集いの会員は約八十人もいるという。次回はもっと盛大な展覧会になることを期待すると共に、油絵の出品がより多くなることを望みたい。ともあれ、みぞれ混じりの空模様の悪い日にぶつかったのに、会場はひきもきらぬ来場者で埋っていた。あながち会場の狭さからくる錯覚ばかりではあるま

い。ご同慶の至りとしよう。

(織内信彦)

三水会新年山行

秩父・四阿屋山

三水会恒例の新年山行が、一月九日、十日の二日間で行なわれた。

一日目は三峰神社の初詣。秩父鉄道の終点、三峰口で下車しバスとロープウェイで三峰口へ登る。参道を歩いていくうちに、どんよりといた空からついに細かい雪が降ってきた。こんな天気なので参拝者も少ない。降りしける雪の中、厳肅な初詣となった。

近くの茶店で昼食となり、雪見酒となるのは自然のなりゆきというものでしょう。そのうち細雪の中に和名倉山の大きな姿が浮かび上がり、背景効果も一段と良くなって酒量も増したいところだが、そこは三水会のこと程よい(酔い)ところで茶店をあとに三峰口へ戻った。

村営バスで今夜の宿、国民宿舎両神荘へ向う。温泉付というので人気を呼んでいるらしい。さっそく入湯し新年会に望む。今年の山行抱負などを語りつつ酒を酌み交わす。

翌日は、予報に反して薄陽がさすほどの天気となった。朝食後、タクシ

に分乗して四阿屋山登口まで入る。

今日は新年山行、ゆっくり、ビスターリで登る。あずまや風の休憩所に着くと視界が開ける。秩父市街に霞が棚引き、削られて無惨な姿になった武甲山が高く見えている。意外と早く姿を変えつつあるこの秩父の名山が惜しまれてならない。

休憩所をあとにするとフクジュソウの群生地になる。驚いたことに黄金色の花がもう点々と咲いていた。この分だと、別名・元日草ともいわれているように元日には綻んだのがあるかも知れない。

一足早い春を愛でたあとは急な登りとなり、小さな岩場も越えて汗ばむころ四阿屋山に着いた。三等三角点標石と小さな祠がある四阿屋山(七七二)の頂上は、一度に全員二十六名が立てないほどの狭さだが、両神山の方が開けていた。

下山後、不動ノ湯で昼食会となり、大いに盛り上がったことはいまでもない。

この二日間の新年山行は、これから幸多い山行の先駆けとなったことを思いつつ西武秩父駅で解散となった。参加者 阿部一孝、乾能尚、岩堀瑞子、大森周作、岡野修、菊地文雄、木村俊博、小林碧、斉藤健治、坂倉登喜子、酒匂輝昌、佐藤芝明、塩沢厚、下野武

司、妹尾幸雄・律子、高田真哉、武田幸男、遠田栄、平沢哲臣、平戸孝夫、他五名

(平戸孝夫)

八方尾根懇親スキー山行

に参加して

吉村健児

毎年一月中旬は行われている懇親スキー合宿は場所を八方尾根に移して今年で四回目を数えることになった。それ以前は白馬の梅池などで行われていたもので、それ等を累計すると二十数回を数えるのではなからうか。

今回は一月十五日から一月十七日まで二泊三日の日程で行われたが、山田会長が参加されたのは今回がはじめてのようです。十五日、十六日、十七日と三日続いて天候が悪く、白馬三山や唐松岳、五龍も鹿島槍も姿を見ることが出来なかった。例年ならば何人かが唐松岳までは登ってくるのだが、第三ケルンまでも行けない始末、しかしながら集会所のベテラン委員の方々の用意周到な計画でいろいろな準備がなされていて、夜のゲーム遊びは「老」も「若」も、「男」も「女」も楽しめる趣向をこらしたもので、大変面白く時を過ぎて戴いた。

最年長の遠田さんも毎年参加されてスキー教室を開いて教えられているの

には頭が下る。地元の信濃支部長の赤羽さんも初めての参加とのことであつたがなかなか面白いと感心しておられた。

私も三回目の参加であります。合宿の雰囲気がいよいので年齢を忘れはるる遠路九州より参加している次第です。この合宿スキーが毎年続けられ、ますます盛大になることを希望して報告を終らせていただきます。参加者は総勢四十八名でした。

'92年忘年会

『こぼれたビール』

'92年忘年会は十二月十二日(土)十七時よりJACルームで女懇・集会・総務の共催で開催された。多少早めなルームへ行くと、橋本さんも準備にかいがいしく働いていた。アリヤしまった、そう言えば彼女に「早く来て手伝ってネ」と言われ、軽くOKの返事をしておいた事を思い出した。時既に遅し。小さくなってこそこそと、それでもさき気ないふりをして席に着く。実はネパール展などに寄って、やっとヒマを潰してから来たのだった。

さて、テーブルの上には女性会員心尽しのツマミが所狭ましと並び、隙間を埋めるようにビールビンが林立、奇特の志士による寄進物がどんと据え

られた。開会の挨拶は手短に入澤さん。そして恒例のショート・スピーチは自然エネルギーの権威鳥居亮先生から登山に於ける自然エネルギーの利用についてお話しを伺う。そして名誉会員の織内信彦さんの音頭で乾杯！

お馴染みの顔、久しぶりの顔、珍しい顔、顔、顔……。あちらでひとこと、こちらでふたこと話す度に杯が傾き、五十人近い大忘年会はたちまち盛り上っていった。

この辺りまでは何とか辛うじて憶えているが、あとの記憶は曖昧模糊として定かではない。多分終盤近くになって抽籤会があり、誰かワインの当たった人と私は景品の取替えっこをした。ところがこのワインの付録としてこの記事のための原稿用紙が付いていたのだ。「シマッタ、謀られたか」と思った時には、またもや時既に遅し。

ふと気がつくともルームにはもう僅か数人しか残っていない。どうやらヤケクソになってせせと飲んだようだ。

「ジョーダンジャネエ、フン、こう見えても国民学校時代は綴り方でちゃんと「優」を貰ってたんだぞ。頭や恥だったらいつでもカイトやるわい！」などと支離滅裂なことを思っていた。

最後になってしまったが、左記の方々からそれぞれを頂戴したことを記して駄文を終る。

坂上様 ウィスキー一本、松田(孝)様 酒二本、吉田様 ワイン一本、川上(光)様 玉子焼どっさり、以上。

有難うございました。(荒木正弘)

・会務報告

一月定例理事会

日時 平成五年一月二十一日 一八・三〇〇

場所 日本山岳会会議室

出席者 山田会長、藤平、松田副会長、小倉(茂)、大森、大倉、入澤、石橋、小倉(厚)、重廣、村井、穴田、山口、南川、藤井、片岡各理事、橋本、西村、嶋原、斉藤各常任評議員、飯野、中島監事

〔委任〕 山本、神崎、関口、伊丹各理事 湯浅常任評議員

◇議事

〔審議事項〕

一、海外登山基金助成について 重廣金利が下がったため、本年度の助成額は二五〇万円である。本日一・三・三〇本会会議室で海外登山基金委員会を開催し以下のように決定した。

マッキンリー 気象観測(科学委員会) 五十万円

バインターブラック峰(信州大学学士山岳会) 八十万円

サルトリロカンリ西壁(日印合同・広島)

山宿スケッチ帖

画文 岡部一彦・2000円 最新刊!

旅の楽しみは「宿の主人との語らいから始まる」という岡部画伯が四季おりおりにとっておきの山宿に泊まり、山麓の風景や草花、趣味の蝶などをスケッチしたカラー画文集。

東北、関東、東海、中部地方から厳選した34軒の山宿を四季の旅情とともに紹介し、各地方の山の幸、地酒、そして温泉と幅広い旅の楽しさが伝わってきます。

A5判168頁(カラーイラスト)

静かな山歩き方とガイド

石井光造著 ●1600円

山の失敗談も含めた静かな山の歩き方読本。静かな山の見つけ方、登り方、泊まり方、思い出の整理法など。

山の気象と天気図

銀谷国衛著 ●1800円

五〇年に及ぶ登山経験をふまえた実践的入門書。山の気象の予知予測のポイント、気象遭難の解析実例など。

季刊 山の本

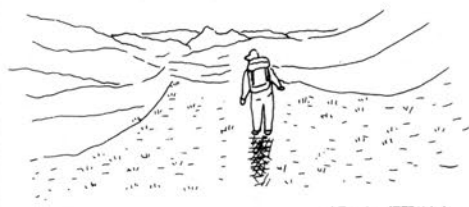
第3号 1,400円 A5判144頁 好評発売中

特集—森を歩く

座談会—今だから話せる山の失敗談

紀行—ピンネシリとパンケ山、巻機山地獄の山スキー、五月の城郭朝日山、奥美濃笹ヶ峰にて、他
コラム—花のスケッチ帖、春の九鬼山、忠さん階級の山の日々、我が闘争、中毒患者の載脱み、他
〈執筆〉 本多勝一、高田宏、堀淳一、田島征三、熊谷樞、田畑真一、加藤美智子、小林紘、他

第4号—6月中旬発売予定



イラスト—沢野ひとし



白山書房

〒153 東京都目黒区駒場4-7-8
TEL:03(3485)1309 FAX:03(3466)3964

●価格は税込

山岳会

七十万円

皇冠峰(JAC東海支部)

五十万円

承認

二、海外登山基金委員会の委員の改選並びに委員会設置についての案文の改定 重廣

平成元年に委員会が設立され本年度で有識者委員八名が全員退任されることになる。今後は有識者委員は六名とし一期二年で半数の入れ替えにしていきたい。従って今回に限り半数の三名は重任することにした。なおこの委員は担当理事が人選し、委員長と協議の上理事会に付議したい。

「海外登山基金委員会の設置について」の第二項の任務の項は従来不明確であったが「すぐれた海外登山の育成をはかるため、海外登山を計画する個人・団体の本基金の助成申請に対する審査を行う」とする。

承認

三、ナムチャバルワ登山委員会解散について 松田

本日一五・三〇より本会会議室において登山委員会を開催、本日をもって登山委員会の業務は終了した。実行委員会については二月九日登山隊事務所で開催し解散する予定である。なお一九九二隊の決算報告は一月末日を以て締め、監事の監査を受けた後間にあえば二月理事会で報告することにした

い。

承認

四、ナムチャバルワ登山報告書の発行について 松田

編集委員会を設置し五〇〇万円の予算を計上の上十月末登頂の一周年迄に発行する予定。読売新聞社で検討中の写真集との関連で発行形態は現在のところ決定いたしかねるが場合によっては『山岳』の別冊としての発行も含め検討していくこととした。承認

五、ナムチャバルワ登山隊の残余装備について 重廣

チベット登山協会、中国登山協会への寄贈と、JACの次の登山のためのラサデポ分とに三分割し三分の一のJAC分の共同装備はラサのチベット登山協会の倉庫にデポした。(保管料無料) この装備の管理は高所登山委員会の担当とする。

通信機材は高所登山委員会の管理とし、気象機材は高所、科学両委員会の共同管理とする。

資料委員会、大町山岳博物館、植村記念財団等から寄贈依頼があった個人装備は、重廣隊長の個人装備で対応する。承認

六、谷口名誉会員遺稿集、初見名誉会員遺稿・追悼集について 小倉

承認

発刊に際し、『山岳』『会報』に寄稿してある文章を収録したい。

〔報告事項〕

一、山研について 小倉

一月十四日山研の写真をとりに太田委員が上高地に行ってきた。自転車振興会への補助金申請は書類が揃ったので来週提出する。

二、合同募金について 石橋

十二月十九日募金委員会を開き、会員に最後のお願いをすることになり一月十六日に郵送した。

会員 一九三一人 三一、八一四、二二九四、女性懇談会 六、一九七、九七九四、企業募金 五一、七三六、〇〇〇円(未収金五六〇、〇〇〇円を含む)

三、韓国山岳会(韓国学生山岳連盟)の講習会について 藤平

韓国山岳会副会長より立山の文部省登山研修所で山岳実技講習を受講したいとの依頼があり、文登研にお願いした。講習人員は三十名、本年五月末の予定。

〔各委員会報告〕

総務委員会 行事予定①第二回中高年登山対策全国大会 二月二十七日 於グリーンホテル②支部事務局担当者会議 二月二十八日③オリエンテーション 三月十三日 於ルーム

フィルムビデオ委員会 ①閲覧用ビデオラックおよび大型ビデオプロジェクトの運搬用バックを購入する。②二月二十五日(木)一六ミ映写会、福原健

司氏作品二点 スキー映画。

青年部 ①一月十三日定例委員会、ビデオ上映「スーキーニャン南壁」②後援をいただいた「アンタークティックウオーク南極点探検隊」は一月十七日に南極点に徒歩、無補給にて無事到着。昨年十一月十一日パトリオットヒルのベースより一四〇〇キロを六十七日かかった。二月七日帰国予定。

学生部 ①一月十二日定例委員会 各大学冬山合宿報告②二月六・七・八ヶ岳鉾泉にて大蔵喜福氏を講師に招きアイス・クライミング講習会を実施する。

集委員会 ①一月十五日(祝)十七日(日)二泊三日の予定で八方池山荘を宿舎として実施した「八方尾根懇親スキー」は、山田会長をはじめ参加者四十八名。②二月六日(土)土曜会のサッポロビール千葉工場見学サポート。

③二月二十日(土)二十一日(日)雪の黒斑山登頂計画。④二月二十四日(水)講演会実施、医療委員会と共催。演題「中高年登山者に対するトレーニング効果」講師 筑波大学教授浅野勝巳先生。⑤一月二十二日(金)二十六日(火)第二回アルパインスケッチ展を支援。場所 渋谷東電温水器センターにて。

新入会員承認 下山敏郎他二十七名

次回理事会 二月九日(火)PM六・三〇
場所 日本山岳会会議室

・ルーム日誌

(1月)

11日 総務委員会

12日 学生部、アルパインスケッチクラブ

13日 青年部、集会委員会

19日 フィルム委員会、山研委員会

20日 三水会

21日 海外登山基金委員会、登山委員会、常務理事会、理事会

22日 図書委員会

25日 総務委員会、資料委員会

26日 自然保護委員会

27日 集会委員会、アルパインスキークラブ

28日 青年部、学生部合同委員会

29日 フィルムビデオクラブ

1月来室者37名

..... : 会員異動 :

1月

退会

平岡茂樹(九一九七) 4・12・31

八木健三(九二四八) 5・1・31

物故

奥山文次(二七三八) 5・1・5

△ △ △

山研・ナムチャ合同募金応募状況

(一月三十日現在)

再度協力をお願いをいたしましたところ早速多数の方々から応募を頂きました。有難うございます。二度目、三度目の方も沢山お入りまして、相当見通しが明るくなって参りました。お名前(後の()内の数字は合計口数です。

(六十口) 本多勝一、(二十口) 坂倉登喜子(六十)、赤羽孝一郎(四十)、片山英一(三十)、(十口) 小倉茂輝(四十)、増本茂(十二)、(八口) 橋本誠二(十)、田中弘美(十)、(六口) 片岡博(十二)、長島隆(八)、木下是雄(十)、小田哲夫、田口二郎(十二)、(五口) 宮下秀樹(二十五)、(四口) 篠田勝久(八)、藤井信己(八)、林豊敏(六)、島尾久子(八)、越田和男、麦倉啓(八)、竹内佐郎(十)、高見和成(八)、尾崎徳郎(十)、村川八重子(十)、宮原利重(八)、青木巖(八)、宮坂登、渡辺典夫、東浜義男(八)、田高卓士(六)、二塚謙三、本多夏生(八)、樋山規夫、上田良三、宮森常雄、近藤良夫(六)、松山斎・タエ子、山口京一、横山八郎(十四)、渡辺勝彦(六)、木村勝久(十)、鈴木嶋夫(八)、水科行雄、錦織英夫(八)、(三口) 妻藤昭郎(六)、(二口) 田部井淳子(十)

(二)、増田昌司、小倉董子(十八)、大森弘一郎(十二)、宮澤美渚子(五・二)、米澤典之、古我静(四)、古我亮一(四)、疋勝男、柴沼武子(四)、萩田實(四)、小倉厚(十二) 岩佐邦彦(四)、土田平三、大場攝雄(四)、井口智博、本城淳子(四)、名須川浩(四)、山本光二(四)、秀島敏(十四)、青木一夫、青井忠四郎、政嘉秀一(四)、宮川欽治、岡本如矢(五)、大塚廣康、金澤健、山口暁(四)、小久保芳宏、西尾俊子(四)、村上巖、寒河江誠、島居亮(六)、小田稔(八)、小林忠治(四)、水沢富一郎(四)、常盤峻士(四)、池田勝利、原田雅弘(八)、船木威志、金森繁三郎(四)、中沢仁(六)、高田哲男、古市進(六)、笠原宏(四)、荒井紀雄、干谷壮之助(五)、関崎健弘、小寺佳美(四)、丹部節雄(八)、古屋学而(六)、井上公利、小池純司、原田武司(四)、佐々木誠(四)、五十嵐篤雄(四)、高田光政(六)、高橋早苗(八)、湯浅充泰(四)、宮原岳子(四)、平野武利(四)、松井潤次(四)、宮下広次、山浦源太郎(三)、野澤隆一(四)、田寺儉治(四)、松本鍊太郎、原利恵子(四)、西原幸子(六)、斎藤直信(四)、野島照雄、大木淑子(六)、長澤光和、塚原道夫(六)、山田哲郎(六)、高田眞哉(六)、鈴木耕治(四)、藤野欣也(四)、杉本

義信(四)、有馬純(四)、保坂一、今成幸夫、作見徹(四)、大山健助、小野寺正英、早川英夫(四)、小田島政行、坂井久光、影山英雄(四)、川北仁(四)、芳賀成明(四)、滝和美(六)、尾上昇(四)、徳永篤司(八)、羽田英彦(二十二)、藤井信一郎、堤甚五郎(四)、本田誠也(四)、青木正樹、船越好文(十)、工業英司、古谷聖司(四)、河合文恒(四)、塩澤厚(五)、村上泰賢、橋村一豊(四)、渡辺立男(四)、垣見侑子、三角朗、井上保(三)、都竹祥子、小池実(四)、濱田文二、松川由博、中谷實悦郎(四)、田上敏行(四)、鈴木一弘(四)、神部一男、山本悦子、河野之保(十)、柏倉信義(四)、加藤節子(四)、小林猛臣(四)、丸山博光、丸野貞彦、木村裕一、太田繁(五)、森武昭、宮本信一、白鳥勝治、諏訪弘、吉井洋之、川俣俊一(四)、名越實、松井辰彌(八)、有沢辰彦、福嶋泰夫、山口悠紀子(六)、吉田彌(六)、石澤六郎(六)、川井英憲、柳下棟生(八)、小野光比古(四)、鳥橋祥子(六)、角谷允孝(四)、澤井政信、目黒元(四)、伊藤主税、椿居澄子(四)、大和田卓、内田玲子(四)、中村彰志、森庄一、吉田光吉(四)、武田武人、太田義一、尾野精治、尾崎祐一、高橋詢(六)、大橋基光(四)、高原三平(六)、今村

千秋、渡辺誠司(四)、山田和雄(四)、
織内信彦(四)、今村正二(六)、渡辺
富衛(四)、山田和男(四)、牧潤一
(六)、矢萩久雄(六)、野口茂、岩崎
三郎(四)、高遠宏(十)、菲沢庸昭
(四)、秋月良造(六)、竹勝生、岩坪
五郎(十二)、白根一(四)、(一・六口)
阿部恒夫(三・六)、(一・四口) 近藤
薫(一・四)、(一・一口) 仲村恒明、(一
口) 原康夫(一)、小倉浩嗣(三)、平
野清司、大宮求(五)、久保田優一、
小池英雄(三)、鬼頭正孝、渋谷好司、
田中重輔(三)、田村俊介、高橋通夫
(三)、松本睦男、梅村洋一、富田弘平
(一)、大須賀俊彦(一)、金尾實(一)、
小川重蔵、清水芳彦(一)、奥村一郎
(三)、水谷弘治(三)、藤江幾太郎
(一)、丸芳五郎、石坂久忠、中村久美
子、野田憲一郎(三)、羽根田二郎
(一)、森谷昭男、出来田耕介(五)、
西川信義、池田昭二(三)、中村一雄
(一)、中野明(一)、井後幸太郎(一)、
月原俊二(三)、桑原重夫、藤原登、
新田隆三(三)、黒石恒(三)、滝口操、
滝口脩、小堤達雄、田島祐一、小栗宏
(一)、沢田良子、伊藤敏男、田邊信行
(三)、金井伸、堀川浩(三)、福森利
明、木村義照、河村清、阿部恒夫(一)、
真実修、西岡健、高田誠(一)、小野
庸(一)、織田沢孝全(七)、織田沢美
知子(七)、村木秀男(三)、山口峯生
(三)、佐々木孝雄(一)、桂俊夫、草
木陽一(三)、松岡憲二、広瀬幸寛
(一)、的場大祐、石井貞吉(三)、安
井豊、伊藤一之(三)、関本俊雄、奥
野正亥(四)、和仁古昇、驚崎好(三)、
山田信明(三)、辻寅吉(三)、太田五
雄、阿部敬子、佐藤泰彦、石沢好文、
田寺尚和、戸谷翠(三)、白井慎、山
田一介、大山昭一、矢尾板二郎(三)、
矢尾板奈々子(三)、井吹光代、河村
忠明、島汀子(一)、福田智恵子、富
山隆(三)、松本宏夫、井上隆夫(一)、
板橋元一(三)、後藤邦慶、子吉格郎
(三)、今井誠(一)、村田数之亮(五)、
遠藤克昭(三)、上田典子(三)、上田
修美、矢野晴彦(三)、渡辺恭三(一)、
三浦俊雄、飯沼和男(一)、井野進、
内藤修、鈴木康仁、(〇・六口) 菊地
健介(一・六)、中村靖弘(一・六)、
藤田健次郎、高木孝(一・六)、佐藤
節子、中園喜一郎、加藤達三郎(三・
二)、轟昌一郎(一・六)、山本宗彦(一
・六)、坂本眞生(一・六)、(〇・四口)
綿引安人(一・四)、境野俊男(一・
四) 田中弘士、矢口重治、(〇・二口)
建部博重、小泉静子(一・二)
(累計 二千二百七十五名、七千七百
八・五口、三千五百六十六万二千七百
三十九円)
△ △ △

次代に残そう美しい山と溪



3234-6659

この電話で
お知らせ
しています

●第31回木暮理太郎翁

碑前懇親会のお知らせ

第31回木暮碑前懇親会は左記の通り
行うので申し込みたい。

日時 五月二十二〜二十三日 (J A C

総会の関係で例年より一週間ず
らす。要注意)

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平

宿泊 右同 有井館 TEL 0551-6

0455

会費 九〇〇〇円(宿泊、食事、記念

品、山行交通費を含む)

交通 J R 中央線韮崎駅下車、増富温

泉行きバス終点下車、舗装道路
を徒歩九〇分(タクシーあり)

行事 二十二日 十七時より碑前祭、

十八時より懇親会
二十三日 クリスタルラインを

主催 日本山岳会山梨支部

●シンポジウム

山の自然保護を考える

登山者のほとんどの人は、自然保護
に強い関心を持っています。しかしそ
の意識をどのような行動で表現してよ
いか戸惑ってしまいます。

今、私たちに求められているのは、
言わば「気分の自然保護から具体的な
自然を守る活動」に参加する一歩を踏
み出すことではないでしょうか。

日時 九三年四月十日(土) 十三時〜十
六時三十分

場所 青山学院大学・総研ビル(〒150

東京都渋谷区渋谷四一四 正門
入口右側、J R 渋谷駅下車十分、
地下鉄銀座線・表参道駅下車徒
歩五分)

入場無料(定員一〇〇名)

出演者(パネリスト)

横山隆一(財団法人日本自然保護協会保護部長)

小泉武栄(東京学芸大学教養学部助教授)

松本 清(フリージャーナリスト)
水上憲宗(戸隠を守り育てる協議会長)

他

主催 社団法人日本山岳会・自然保護

委員会(〒102東京都千代田区四

番町五―四サンビュウハイツ四

番町六〇三―三二六一―四四三

三

●第十七回若葉会山行の予告

今年の若葉会山行は静岡支部との共催によりヤシオツツジの群落で有名な南ア深南部前衛の山「岩嶽山」に決りました。左記の要領で開催の予定です。(詳細は四月号『山』に掲載します)

実施日 五月二十二日(土)、二十三日(日)

登る山 岩嶽山(二万五千四高郷、大居)

宿 ログペンション「シンフォニー」

二―

その他 東京からバス仕立ての予定。

(足の便悪いところです)

集委員会

●ナムチャバルワ写真展

ナムチャバルワ写真展が左記のように決定したのでお知らせ致します。

記

日時 三月二十四日(水)―四月六日(火)

場所 小田急デパート

「彩画山影」出版記念

●松田敏男 山の版画展

日時 四月十三日(火)―十八日(日)

場所 平安画廊 京都市寺町通三条上

ル六〇七五―一三三―一〇六九四

※「彩画山影」……………予価四八〇〇円

編集後記 ▲編集作業は皆さんよりひと月前をゆく。本号で平成四年度は終わった。

(二月十一日A・O)

平成五年三月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田 二郎

編集代表 小倉 厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂